

学会報告

第2回日独エイズシンポジウム（ドイツ開催）の報告

岡本 尚¹⁾, 市川 誠一²⁾, Norbert H. Brockmeyer³⁾

¹⁾ 名古屋市立大学大学院医学研究科, ²⁾ 名古屋市立大学大学院看護学研究科

³⁾ Bochum 大学医学部, ドイツ・エイズ学会会長

一昨年11月8-9日に名古屋市立大学で開催された第1回日独エイズシンポジウムの結果を受けて、第2回日独エイズシンポジウムがドイツのルール工業地帯の中心都市の一つボッカム市で開催された。今日のHIV/AIDSの拡がり方を見ると、この問題はすでに基礎医学・臨床医学・社会医学の枠を超えて、社会政策・教育政策や一般のボランティアおよびNGO活動にまで及んできている、ということの具体的な認識が第1回シンポジウムの成果のひとつであった。もう一つの成果は、日独シンポジウムに参加したエイズ研究者のそれぞれの研究背景や価値観が次第に双方に共有されてきたことであった。国際エイズ会議に言及するまでもなく、多くのエイズ関連会議は、余りにも膨大にふくれあがりすぎて、とすれば「木を見て、森を見ず」のそしりを受けるような構成となってしまう、全体像をとすれば見失いそうな状況となっている。これを二国間の国際会議に限り、参加者も自らの信ずるところを発表する意思のある者にしよれば、実は膨大化したエイズ研究の縮図となりうるものが、少なくとも前回と今回の日独エイズシンポジウムに参加した者には判ってきたのではないか。その証拠に、異なる分野の研究者らが互いに母国語ではない英語を駆使して、会場の内外で議論する姿があちこちに見受けられた。すでに国際学会に慣れた者同志とはいえ、「日独エイズシンポジウム」ならではある一定の雰囲気というものが醸成できつつある。

第2回日独シンポジウムの概略

第1回の日独エイズシンポジウムでは、ドイツNRW州科学技術副大臣のDr. Michael Stueckradtを含む2名の行政官がわざわざドイツから来日され、開会宣言をされるとともに、会議にも参加され、さらに愛知県および名古屋市の行政当局者らと懇談された。それ以外に、7人のドイツ側演者、および1名の取材記者が来日し、帰国後ドイツの有力な新聞に記事が掲載された。これに対して、日本からは11人のスピーカー、愛知県、名古屋市のエイズ担当者の出席、および中日新聞記者がシンポジウムに参加した。

第2回の開催されたドイツのボッカム市は、ルール工業地帯の中心にあって、日本からはいくつかのルートがあるが、多くの参加者は日本からまずフランクフルト国際空港

に降りて、ドイツの誇る特急列車に乗ってジュッセルドルフおよびエッセン経由でボッカム市に向かった。ライン川を右側に見ながらおよそ3時間ほどで到着した。日本の新幹線ほど速くはないが、ドイツの豊かな風景を楽しむことができた。

ボッカム市は、人口40万人の中都市であるが、鉱工業の中心として栄え、地味であるが裕福な都市である。市内は公園や博物館および美術館などの文化施設に恵まれ、典型的なドイツの街である。シンポジウムはボッカム大学から少し離れた公園の中の素晴らしい会議場で開かれた。

Brockmeyer教授と岡本の開会宣言の前に、NRW州政府の高官による素晴らしい挨拶があり、一同の身が引き締まった。その後、引き続いて基礎医学のセッションが始まった。まず、岡本が計算化学の手法と分子生物学実験を用いたTat-TAR-Cyclin T1の複合体の立体構造予測を発表し、その後ドイツのSticht教授がHIV-1プロテアーゼの構造の分子ダイナミクス計算に基づく薬剤抵抗性の解析の最新データを発表した。ついで、Prof. MeyerhansがHIVの分子進化を数学的モデルで表現する大胆な試みを話し、Walter博士が薬剤抵抗性HIVに関する最新のデータを発表し、午前中の最初のセッションが終了し、休憩となった。その後も基礎医学のセッションが継続し、まず山本教授がNOD/SCID/IL2Ry (null) マウスにヒトの造血幹細胞を移植してHIV-1感染の実験動物モデルを発表されると、大きな反響があった。これに関連して、Prof. HarrがHIV感染症におけるHLAと免疫応答の関連を話し、馬場教授がナノ技術を駆使した新しいAIDSワクチン開発を発表し、次第に会場の熱気が高まっていった。ドイツ側の基礎医学の重鎮のWolf教授がヨーロッパにおけるエイズワクチン計画EUROVACの全貌を話すと、昼食時間になったが、興奮さめやらぬ参加者は、ランチプレートを囲い込みながら、至る所で日独の研究者が入り交じってシンポジウムの話題に花を咲かせていた。

ランチの時間を利用して主に日独の若い研究者のポスターの展示と発表があった。また、シンポジウム開催のために補助を受けた各種関連企業の掲示もあったが、参加者は十分な時間がこれらの掲示に費やせなかったことが最大の反省点であった。

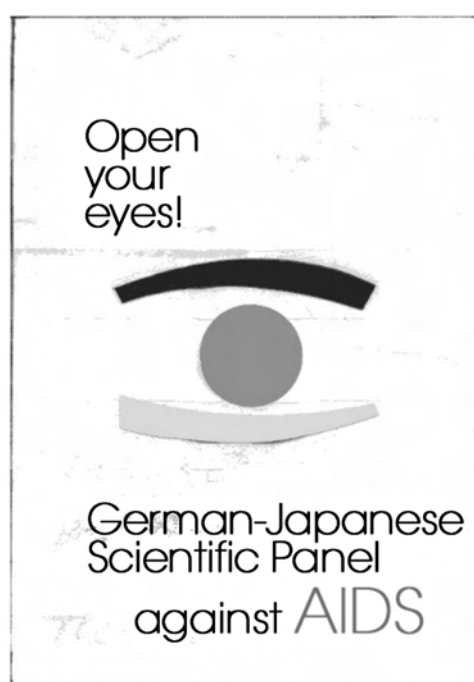
昼食後は、臨床医学のセッションとなり、まず金田博士が HIV 感染者での臨床的特徴と感染者体内の HIV の RNA および DNA レベルの動きや薬剤への反応性を報告し、Arendt 博士が AIDS の中枢神経病変と脳脊髄液中の HIV に関する研究成果を発表した。また、Wasmut 博士は HIV と肝炎ウイルスの混合感染を HIV 関連疾患の一つとして注目し、Behrens 教授は抗レトロウイルス剤投与に伴って起こる様々な代謝異常を論じた。

ついで、コーヒープレイクの後は、社会医学・医療政策のセッションとなった。まず、スイスのジュネーブにある WHO 本部から AIDS 担当の田村博士が参加して下さり、WHO の唱える“3 by 5”から“universal access”へと標語の変化したいきさつと今後の WHO の対 AIDS 政策の進め方について説明があった。世界中の状況、特に医療インフラの整っていない国の AIDS 対策が如何に困難であるか、また我が国の近隣では台湾での HIV の蔓延が大きな脅威となっていること、などを膨大な疫学データをもとに発表された。ついで、ドイツの海外 HIV 戦略についての報告があり、木原教授が日本の若い世代の HIV 感染に関する赤裸々な社会疫学的分析結果を発表された。ドイツ人が日本人に抱いていた幻想が音を立てて崩れる思いがした。その後、同様な若者の問題をドイツではどう捉えているかについて Pott 博士から発表があった。このように日独の相互の研究者の発表は、主にドイツ側の好意的な配慮の結果と思われるが、極めて良く関連し、議論も良くかみ合っていたように思われた。続いて、HIV 感染に関わる社会医学の最大のそしてすでに古典的な問題として MSM の問題がとりあげられ、Langer 博士がドイツ側の MSM に関する積極的な HIV 感染予防の実態を報告し、市川教授が日本の MSM を HIV 感染から守りさらに人権的な問題から守るための NGO の活動とその有効性を報告した。最後に、

Krone 博士が、HIV 感染者および AIDS 患者と労働環境に関してドイツの取り組みの数々を紹介した。

こうして長い一日が終わった。夜は、全員で Brockmeyer 教授の行きつけのレストランに行き、議論の続きをドイツワインや本場のビールを味わいながら行った。

次の図は、第 2 回日独エイズシンポジウムで初めて使用された本シンポジウムのロゴである。日独双方の国旗の特徴とともに、「目を開け open your eyes」の標語を効果的に表記した、素晴らしい出来映えのものである。参加者全員の合意を得て、今後も本シンポジウムのロゴとして、使っ



第3回シンポジウム（日本開催）へのご案内

平成17年11月に第1回、平成18年11月に第2回日独エイズシンポジウムを、それぞれ名古屋とポッカム市（ドイツ）で開催して参りました。これらの成果を受け、今回は日本学術振興会の補助も受け、第3回の同シンポジウムを、以下の日程で日本エイズ学会の開かれる広島市にて、高田昇学会長のご厚意をいただき、学会開催の直前に開催することになりました。

参加および発表希望者を広く募りたいと思います。希望者は、日本側の世話人に遅くとも10月31日までにご連絡下さい。シンポジウムは全て英語を公用語とし、口頭発表者の選考は、主として科学のおよび社会的な評価をもとに行いますが、ドイツ側の発表との関連性も考慮されます。なお、選抜された発表者には、旅費と本シンポジウム開催期間の広島での滞在費を授与しますので、奮ってご参加下さい。

日本側世話人：

基礎医学・臨床医学

岡本 尚（名古屋市立大学大学院医学研究科、電話 052-853-8205、E-mail : tokamoto@med.nagoya-cu.ac.jp）

社会医学・エイズ医療政策

市川誠一（名古屋市立大学大学院看護学研究科、電話 052-853-8089、E-mail : itikawas@med.nagoya-cu.ac.jp）

第3回日独エイズシンポジウムの開催概要

期 日：平成19年11月25日（日）～11月27日（火）

場 所：広島国際会議場 会議室「蘭」（連絡先：広島観光コンベンションビューロー 電話 082-244-6156）

公用語：英語（スライドの文字も全て英語として下さい。なお、同時通訳はございません）

参加者：日本側12-15名、ドイツ側11名、発表を希望される方は10月末までに英文抄録をお送り下さい。

※ 優秀演題に選ばれた方には旅費の援助もありますので、奮ってご応募下さい。

ドイツ側の参加者と演題名（予定）

—Prof. Rockstroh : HIV and hepatitis C coinfection

—Prof. Brockmeyer : Data of the Competence Network HIV/AIDS

—Prof. Arendt : CSF HI-viral loads — different neuropsychological deficit patterns

—Dr. Sopper : the Rhesus monkey model

—Prof. Harrer : CTL response against HIV

—Dr. Knechten or Dr. Jgeroa (the Board of the German Association of AIDS physicians) : the specific German structure of treating patients in social AIDS practices

—Prof. Meyerhans : Gates-Projekt — the measurement of HIV-specific immune response in vaccinated persons and the importance of cryoconservation

—Prof. Wolf : New unpublished data on therapeutic vaccines

—Prof. Behrens : Metabolic alterations

—Dr. Escobar-Pinzon : Executive Director of the German AIDS-Hilfe self-support network : German approaches and strategies in prevention

—Prof. Racz/Dr. Tenner-Racz : Immunologic and immunopathologic changes of the rectal mucosa during early HIV infection